

孝行集と『道安仕母事』

黒田彰

唱導資料であり、孝子説話集でもある静嘉堂文庫蔵、孝行集については、その中心をなす孝子伝閑連話及び、周辺話群その他をめぐつて、それらと孝子伝などとの関わりを報告しつつ、孝行集の本文を翻刻、紹介したことがある（拙稿「抄と文芸—孝行集のこと—」）。

〈国文学解釈と鑑賞〉56・3、平成3年3月）、「静嘉堂文庫蔵孝行集について」〈説話論集〉第一集、清文堂出版、平成3年）、「唱導、注釈、説話集—静嘉堂文庫蔵孝行集について（続）—」〈国学院雑誌〉92・1、平成3年1月）、拙著「中世説話の文学史的環境 続」（和泉書院、平成7年）I・三1、2、3に再録。〈静嘉堂文庫蔵孝行集〉〈愛知県立大学文学部論集（国文学科編）〉39、平成3年3月）。孝行集第③話「弥天道安母孝事」は、その震旦説話の一条であり、非孝子伝系、仏教系（僧伝）とも呼ぶべき一条であるが、

と見えるぐらいらしい。そこでまず、道安の「弥天」と称される謂われ

悟^ス 年二十余^{ヨリシヤ}、問^{ナフ}道^ト、道安法師^ト。因^{ヨツク}聽^{タク}講^{スル}般若經^{ハノニヤ}。事豁然トシテ開

や、釈氏の名乗り等の説明も含め、道安に關する概略として、望月

仏教大辭典の道安の項を摘記しておこう。

支那常山扶柳（河北省冀州西南六十里）の人。姓は衛氏、家世儒を業とす。年十二歳にして出家せしも、形貌醜陋なりしを以て重んぜられず、田舎に駆役せらるゝこと数年、後弁意經を聞誦し、成具光明經を覆誦するに及び、初めて其の才を認めらる。既にして具足戒を受け、鄴城の中寺に至りて仏圓澄に師事し、時に師の講を覆誦し、疑難を辯解す。尋いで諸方に遊学して備さに經律を求め、後難を渡沢に避け、竺法濟及び支母の陰持入經を講ずるを聞き、又同学竺法汰と共に飛竜山に憩ひ、兼ねて僧先、道護と交を結ぶ。尋いで太行恒山に入り、寺塔を創立して衆を化し、時に慧遠等來りて其の門に投じ、又武邑太守盧欽の為に講を開く。年四十五にして冀部に遷りて受都寺に住し、徒衆数百を領す。東晉永和五年後趙石虎卒し、石遵嗣いで立つや、其の請を受けて華林園に入り、後國連傾くに及びて牽口山に赴き、又冉閔の乱に会うて王屋女机山（一に女休山に作る）に入り、尋いで陸渾山に遁れ、教法を弘通せんが為に法汰を楊州に遣はし、又法和をして蜀に入らしめ、自ら慧遠等五百余人を率みて襄陽に至る。習鑿齒あり、師を訪うて自ら四海の習鑿齒と称す、師乃ち答ふるに弥天の釈道安を以てし、時人歎じて

名答となす。師を弥天の道安と称するは蓋し此の故事に依るなり。時に征西將軍桓朗子師を要して江陵に至らしめしも、朱序の請に依りて復た襄陽に還り、白馬寺狹隘なるを以て滑河張殷の宅を檀溪寺となし、五層塔を建て、四百の僧房を起し、涼州刺史楊弘忠は為に承露盤及び丈六仏像を作り、前秦苻堅も亦外国金箔倚像等を寄送す。師襄陽に在ること十五年、毎歲放光般若經を講じ嘗て廢せず。東晉孝武帝其の徳を欽し、使を遣して問を通す。東晉太元四年苻堅襄陽を攻め、師及び習鑿齒を伴ひて長安に還り、輔弼たらしむ。師乃ち城内五重寺に住して法を弘め、僧衆數千人あり。時に法和と共に僧伽提婆、曇摩離提、僧伽跋曇等の訳經に參與して音字文旨を詮定詳覈し、又旧時の訳經譏を存し、義通せざるものあるを概し〔中略〕師又魏晉の沙門が皆其の師に依りて姓を称するを見、大師の本は釈尊より尊きはなしとし、自ら釈氏と号したるに、尋いで增一阿含經訳出せられ、其中に四姓為沙門皆称釈種の文ありしにより、人皆其の卓識に感じ、後僧徒は悉く釈氏を称し、遂に佛教の正式となれり。師は毎に弟子法遇等と弥勒像前に於て誓を立て、兜率に生ぜんことを願じ、兜率往生の先蹟をなせり。又嘗て西域に羅什あるを聞き、苻堅に勧めて之を請ぜしめんとし、苻亦師の風を聞きて東方に聖人ありと謂ひ、互に欽敬せしが、遂に

相会するの機なく、前泰建元二十一年二月疾なくして寂す、年七十二。（一説七十四）城内五級寺に葬す。師左臂に劍の如き皮あり、又肘外に方肉あり、上に通文を存せしを以て時人呼んで印手菩薩と称す。法を受くる者慧遠を始め、慧翼、法遇、慧徽、道立、慧持、慧永、慧昌等あり（下略）

ところで、十二歳で出家を遂げた道安については、高僧伝以下の所謂、正統的な仏教史料の中に決してその事跡を見ない、もう一つの事跡が伝えられている。孝行集³⁴「弥天道安母孝事」がそれであつて、道安の母親に対する孝行と、それを快く思わない弟子との対立、さらに弟子への道安の反論を骨子とする、孝子道安譚である。以下、その謎に満ちた孝行集の道安譚をめぐって、最近気の付いた若干の事実を点綴してみたい。

二

まず孝行集³⁴「弥天道安母孝事」を示す。孝行集の本文は、次の通りである。

弥天道安母孝事。夫、大唐、弥天道安法師也、無止事、智道兼備、大學匠、御在ス。其比亦、光宅寺僧法師也、是モ道、結句増ル歟ト覺、智深高徳名聖、有リキ。道安、彼、破而云、光宅転、網々、乱分受ハ々、大塵失ト破下フ正歎。亦南地北地、十三人法

師ヲハ余者望風塵々。彼程名匠ナル間、妙楽云、從^二安公^一以来、一切經判大小、亦始分三段、文。去ハ、此師ハ、三千人有弟子。昼夜莫廢、法門論談、不斷ナレハ、天下挙、生身□來如、奉^レ為信仰、無限。仍、此師、持老母下フケルカ、吾力女人、不入事ナレハ、卅丁坂下^レ令居住、毎日不怠自身、御弟子達^レ引連、下向アリ、対面被成ケル、至孝法師也。有時、御弟子達^レ被申^{ケルハ}、坂下^レ御下向^ヲ、五日一度斂亦、十日計一度、被成ヨカシ。學問障^テ候、被申^{ケレハ}、安師言、尤^モ、旁々御道理也。為吾母^ノ障^{ハリ}サヘ申、無是非^ノ事也。從是以后、一人モ御出無益也。吾ハ、重恩蒙母ナレハ、日參不怠。其故、四恩中、父母恩、至深。百孝中、父母孝、專行スル者也。所以者何。仏說モ、慈父恩高如山王。悲母恩深如大海。我若住世於一劫、説不能尽文。亦、父母恩重經二ハ、別而有十恩。縱有^{孝子}五体、タクキテモ、一日片時恩モ不可^レ報尽。何旁々、左様无^レ情、吾^モ孝行^ヲサマタケ下フヤ。御身達ニハ、吾母無^レ恩間道理也。其モ、理ヲ申ハ、加程奉公、可有之義也。其故、一字千金恩蒙下フ条、坂下^レ日參、何□カ苦シカラム。乍^レ去、向後ハ、御下向ハ無益也、被^レ仰^レ、御弟子達、理被貲^レ、無言語、打臥泣ヨリ外事ナシ。此御說法、奉^レ聞皆□、不孝ナリシ人ハ、孝心ハケマシ、亦、從^レ本孝行ナリシ人ハ、弥ヨ孝行、□前ニヨ

り上ツ、御供申、坂下、被向為下フ也。去、此安師、常母御教化アリシハ、別事ナシ、弥陀名号、勸下フ。其御言云、夫三世

諸仏、諸教、何雖殊勝深々回有、就中、弥陀如來御誓願、取分回有。其故、不云機根上下、不論修行淺深、有智無智有無戒、不選道俗男女、依一念十念名号功德、速生三九品八池心蓮、得無比樂事、諸法内ニハ、以念佛為最上、諸仏ニハ、以弥陀為第一。御自モ拋万事、一心不亂、無余念、唱名号、此度、出苦界、至安樂邦、下フ、御勤有、悲母任教、念佛一昧テ、生年八十二而、奇瑞遂一大往生、下フ云々

さて、孝行集のこの話については、七年前、一通りの道安関係の資料に目を通してみたものの、その出所の全く掴み難かったことは、先に触れた如くであるが、最近納富常天氏による一連の湛谷関

係、金沢文庫資料紹介を繰っていて、道安の名前が目に付いた。例え、『悲母因縁』（副題「惠咲勸邪見母令臨終正念事」等）と題する後欠本に、

弘天道安法師、有三千人弟子。其中有惠咲比丘云者。彼比丘之母儀、邪見放逸、不弁因果、懈怠無漸、無信仏法、……。

とあり（納富常天氏「湛谷の唱導資料について〔〕」、「鶴見大学紀要」30（第4部人文・社会・自然科学編）、平成5年3月に掲る）、また、

【悲母遠忌旨趣】と題するものに、

アノ弥天道安法師、我手致悲母於給仕事、聊被思食候……不異弥天仕母之古志……

とある（納富常天氏「湛谷の唱導資料について〔〕」、「鶴見大学紀要」31（第4部人文・社会・自然科学編）、平成6年3月に掲る）などである。これらにより、孝子道安譚が独り孝行集の作り話でないことをや、それがまた、鎌倉期、唱導の地平において、存外広く知られた話柄らしいことは、およその推測が付くのだが、さらに驚いたことは、同じく納富氏「湛谷の唱導資料について〔〕」の中に、「道安仕母事」と題する一帖の本が、共に紹介されていたことである。件の書は、表紙中央に「道安仕母事」という標題があり（左下「春之」）、末尾に、

元亨四年四月晦日大仏妙房悲母十三年

という奥書きが記される、元亨四（一二三四）年湛谷加筆本で、本の大きさが「13・5×13・7cm」に過ぎない所からして、永井義慈氏の言われる説草、また、岡見正雄氏の言われる小さな説話本であることは、間違いない。なおこの「道安仕母事」は、納富氏が「その内容や使用目的によって」（C）追善供養（逆修も含む）に使用したもの（百六部）で、〔十三年忌のみに使用したもの（七部）の内、⑩番に分類されたものに当たり、且つ、「本文は他筆であるが湛谷が加筆したもの」にも該当している（納富常天氏「湛谷の唱導資料

について(一)、「鶴見大学名要」29(第4部人文・社会・自然科学編)、

平成4年3月)。かくして金沢文庫に、一本の「道安仕母事」と題する説草の存在することを知ったが、その後、金沢文庫にはもう一本、「道安仕母事」の伝えられていることに気が付いた。その

別の一本は、テーマ展図録「仏教説話」(神奈川県立金沢文庫、平成9年2月)モノクロ図版 解説「2、中国・日本の高僧に関する資料」20、21頁に本文影印の収められた、「一帖、鎌倉時代」と記されるものである。本書は、納富氏翻刻に掛る先の一本に較べ、納

富氏が「以上湛谷筆」「以下湛谷筆」と認定された、湛谷加筆の首尾を欠く(則ち、「以下他筆」とされた本文の部分に当たる)等、明らかに別本で、故に、金沢文庫には、二本の「道安仕母事」が伝存していることになる。その二本を、今仮にA本、B本としよう。

以下、専ら納富氏翻刻のA本に振りつつ、そのB本との異同を()内に掲げる形で金沢文庫本「道安仕母事」の本文を示せば、次の通りである。

尺、弥天道安^{トトロ}宗水遍流^{トトロ}東夏^{トトロ}、德風遠扇^{トトロ}西天^{トトロ}。弥天^{トトロ}天ハヒコルト^{トトロ}読候。唐土一天諸宗^{トトロ}、帰名^{トトロ}德受法門。天竺^{トトロ}異鄉^{トトロ}、向震^{トトロ}旦^{トトロ}、唱^{トトロ}南方東方護法菩薩^{トトロ}(以上、B本無し)

祝^{トトロ}弥天道安申人候。智行德至^{トトロ}、誠無止^{トトロ}上人候。而有一人老母。片時^{トトロ}不離^{トトロ}傍^{トトロ}、昼夜致孝行^{トトロ}。夜表^{トトロ}手覆^{トトロ}、昼儲^{トトロ}自備^{トトロ}。行^{トトロ}時

懸肩^{トトロ}扶之^{トトロ}、坐^{トトロ}時^{トトロ}親見^{トトロ}從心^{トトロ}。九夏三伏之暑月^{トトロ}、扇母^{トトロ}無暇^{トトロ}(「母^{トトロ}無暇^{トトロ}」は、湛谷筆)、玄冬素雪之寒朝^{トトロ}、溫母^{トトロ}無隙^{トトロ}。凡^{トトロ}、論談說法筵^{トトロ}、無思忘^{トトロ}、坐禪經行床^{トトロ}、更無懈時^{トトロ}。不憚人目^{トトロ}、不顧世^{トトロ}〔傍^{トトロ}〕、結句見苦^{トトロ}、片輪痛^{トトロ}、程候問^{トトロ}、弟子同^{トトロ}

〔宿^{トトロ}〕集^{トトロ}、談義^{トトロ}候様^{トトロ}、我等^{トトロ}〔なし〕師道安^{トトロ}、戒行高備^{トトロ}、才幹過世^{トトロ}、國重宝也^{トトロ}、世明灯也^{トトロ}。道俗誰不^{トトロ}、貨賤誰不^{トトロ}〔敬^{トトロ}〕。サ

レハ、命人^{トトロ}逃人^{トトロ}、被致^{トトロ}孝行^{トトロ}、何可^{トトロ}。何況^{トトロ}、數輩^{トトロ}門弟中^{トトロ}、

何^{トトロ}被仰付^{トトロ}タラウニ^{トトロ}、聊ヨモ疎^{トトロ}。我等置心^{トトロ}歟^{トトロ}。又、我等志不

懇歎^{トトロ}。奉仕師長^{トトロ}、如來遺誠^{トトロ}、代師^{トトロ}仕^{トトロ}母^{トトロ}、尤所願^{トトロ}也。我等

優可^{トトロ}仕^{トトロ}間^{トトロ}、師輕々^{トトロ}程振舞^{トトロ}、進^{トトロ}恥^{トトロ}、仏陀照^{トトロ}〔覽^{トトロ}〕、退^{トトロ}恨^{トトロ}道

安之置^{トトロ}心^{トトロ}。仍^{トトロ}、為散此不審^{トトロ}、面々進^{トトロ}道安前^{トトロ}、尋^{トトロ}此子細^{トトロ}。

時^{トトロ}、道安流^{トトロ}涙^{トトロ}苔^{トトロ}。□□〔々様^{トトロ}〕、汝等誠^{トトロ}我^{トトロ}、尤有^{トトロ}其謂^{トトロ}。但^{トトロ}

人必有盛^{トトロ}、云物^{トトロ}〔盛^{トトロ}〕、有乳母^{トトロ}而^{トトロ}、我生^{トトロ}人間^{トトロ}來^{トトロ}。

只悲母懷^{トトロ}長^{トトロ}。サレハ、夏熱^{トトロ}、我身熱^{トトロ}、人抱^{トトロ}、冬寒^{トトロ}、我身

寒^{トトロ}、人預^{トトロ}、夜^{トトロ}打解^{トトロ}マトロム事無^{トトロ}、昼^{トトロ}又^{トトロ}、心安^{トトロ}時無^{トトロ}。

苦^{トトロ}其身^{トトロ}、勞^{トトロ}其心^{トトロ}、事柄思^{トトロ}〔煩様^{トトロ}〕、楚竹難記^{トトロ}、恒沙非譬^{トトロ}併^{トトロ}、自手^{トトロ}被^{トトロ}養育^{トトロ}、今^{トトロ}同^{トトロ}四海浪^{トトロ}、仏道修行方軌^{トトロ}、心^{トトロ}〔この前に、B本「吾母^{トトロ}、非君母^{トトロ}。其於義之采^{トトロ}、乃吾母也。」焉可以勞^{トトロ}乎^{トトロ}〕の二行を、丁の左端に傍書する)今度知^{トトロ}出離之道^{トトロ}、偏莫^{トトロ}不^{トトロ}老母^{トトロ}重恩^{トトロ}事^{トトロ}。(ミ) サレハ、設^{トトロ}手寒谷^{トトロ}水^{トトロ}結^{トトロ}、猶有余^{トトロ}哉^{トトロ}、不可報^{トトロ}其恩^{トトロ}一分^{トトロ}。設周^{トトロ}

暮山薪荷來、又可悲哉、不可。〔なし〕酬其德絹塵〔少々〕。
何為安^{シナ}我身、片時可借他力^{ハシ}乎、泣々苦候シニ、誠之門弟等、
共拭^{シナホ}三衣袂^{ミヅケ}、依理^{ハシ}退散候。夫、道安、尺門之耆老也、仏法
之棟梁也。彼猶捨恥忘憚^{ハシ}、手仕母^{ハシ}。我等、智行全闕、威儀
俱無。何惜身顧我、悲母孝行疎^{ハシ}。〔以下、B本なし〕
誰須深致^{ハシ}知恩報恩之誠、專廻^{ハシ}悲母得脫之計。

金沢文庫藏「道安仕母事」A本、B本は、A本における湛谷加筆の首尾を除けば、殆ど本文間の異同が認められず、両書は同本と考えられる。そして、一見して、孝行集³⁴⁾「弥天道安母孝事」と説草「道安仕母事」とに、深い関連のあることは明らかなのだが、孝行集と説草の関わりといつものは、具体的にはどのようになっているのだろうか。

二

孝行集「弥天道安母孝事」と説草「道安仕母事」とを比較してみると、両者の書出しが、
・弥天道安法師述、無止事、智道兼備、大学匠、御在ス（孝行集）
・叙弥天道安申人候。智行德至、誠無止^{ハシ}上人候（道安仕母事）
がよく似（孝行集冒頭の、説草に見えない以下の記述については、
さらに一考を要する）、また、両者が他書不見の、道安の母親に対

する孝行を主題とし、加えて、一篇の結構は共に、弟子が道安に抗議、対立して、道安がそれに反論、論破する形となっている所までは、両者に共通しており、両者に深い関連のあることを窺わせる。しかし、例えば、弟子との対立、道安の反論における、両者の展開の具体相は、まず、道安の母は三十丁の坂下に住んでいて、道安が弟子達を伴い坂下へ日参する（孝行集）、道安は母と同居している（道安仕母事）等、前提的に異なっていることを始めとして、弟子達は、自分達の日参が「学問障」になるので、道安の日参を五日毎或いは、十日毎に改めるよう迫る（孝行集）、弟子達は、道安の母を離れぬ奉仕が「結句見苦^{ハシ}片輪痛^{ハシ}」ないので、弟子の内の誰かにその奉仕を交代させよと勧める（道安仕母事）など、話柄の展開の仕方が全く異なっている。従って、以下に統く道安の弟子に対する反論も、自分（道安）は母に恩があり、弟子達は道安に恩（「一字千金恩」つまり、師としての恩）がある、故に、弟子達も師としての道安の母には恩があることになり、弟子達は道安に伴われて、日参しなければならない（孝行集）、重恩のある自らの老母への孝行というものを、他人に任せて、自分が樂をするということには出来ない（道安仕母事）など、当然相異なる筋道を辿ることになる（但し、道安の言出しの、「尤^{ハシ}、旁々御道理也」（孝行集）、「汝等誠我、尤有其謂」（道安仕母事）等、よく似ることが興味深い。

また、両書共、師の恩を上げながら、一方では道安の論辨となり〈孝行集〉、もう一方では弟子の論辨となつていて〈道安仕母事〉

なども同様である。右を最大の相違点として、さらに引用文献が

大幅に異なることその他、孝行集「弥天道安母孝事」と説草「道安仕母事」との間には、直接的な関係はないものと見做される。すると、両者は全く無関係な存在ということになつてしまふのであろうか。どうやら両者の関係は、見掛け程、単純なものではなさそうだ。

両者の関係の複雑さを物語る例を、さらに二点程上げてみよう。

第一に、引用文献が殆ど共通しない両書にあって、例外的に両書の一一致して引く經典がある。それは父母恩重經である。例えば孝行集「弥天道安母孝事」の、

亦、父母恩重經ニハ、別而有十恩。縦有孝子五体タタキテモ、

一日片時恩モ不可報尽

は、大報父母恩重經の、

猶有三十恩……仮使有^レ人、為於爺娘、打^レ骨出^レ髓、百千錐^レ戰、

一時刺^レ身、經^レ百千劫、猶不^レ能^レ報^レ父母深恩

に挿るものであろうし、説草「道安仕母事」の、

夏熱我身熱^レ人抱^レ冬寒我身寒^レ人預^レ夜打解^レマ

トロム事無^レ、昼^{ナカニ}又、心安^ク時無^レ苦^シ其^ノ身^ヲ勞^シ其^ノ心^ヲ事柄^ヲ……

設手寒谷水結^レ、猶有余^レ哉、不可報^レ其^ノ恩^ヲ一分。設肩暮山薪荷

來^セ、又可悲^セ哉、不可酬^ス其^ノ德^ヲ絹塵^モ

も、大報父母恩重經の、

不憚^シ劬^メ勞^ヲ、忍^シ熱忍^シ寒、不^レ辭^シ辛苦^ヲ、乾^シ尻^ヲ臥^ス、湿^シ處^シ母眼^ヲ……

仮使有^レ人、左肩担^レ父、右肩担^レ母、研^レ皮止^レ骨、骨穿至^レ髓、

遙^シ須弥山、經^レ百千市、猶不^レ能^レ報^レ父母深恩^ヲ……：仮使有^レ人、

手執^シ利刀、為^シ於爺娘、剝^シ其^ノ眼睛^ヲ、獻^ス於如來、經^レ百千劫、

猶不^レ能^レ報^レ父母深恩^ヲ

に挿り、和漢朗詠集下、雜^シ仏事「叩^シ凍負來寒谷月、払^シ霜拾^シ暮

山雲」（採^シ果汲^シ水、慶保胤^ヲ。法華經提婆達多品の阿私仙故事に基^づく）を重ね合わせたものである（説草の「夜^{ナカニ}打解^シマトロム事無^レ、昼^{ナカニ}又、心安^ク時無^レ」など、劍巻に「夜トテ安ク寝モセス、漏

タル所ニ我ハ臥シ、乾ケル所ニ和殿ヲ置」（慶長古活字版）等、酷似する言回しが見える。なお父母恩重經については、拙著「中世説

話の文学史的環境」（和泉書院、昭和62年）I-3-4参照）。このように、両書が一致して父母恩重經を引用することは、單なる偶然とも思われない。父母恩重經は孝經典であつて、偽經とされるものである。原理的に世俗の関係を否定する仏教においては、子の親に対する関係である孝という考え方は、成り立ち得ない。しかしながら、孝の觀念の發達した中国にあつて、仏教が民衆の間へ浸透してゆくに際し、孝の考えを無視することは叶わず、便法として作成された

のが孝經典であり、偽經、疑偽經典であると言われる。孝行集、説草の両書が、高僧たる道安の孝のあり方に關する引証として、父母恩重經を用いることも肯けよう。ところで、翻つて思えば、両書の主題——道安の母親に対する孝行——も同じ問題へと連なつてゐる。

高僧道安が母に孝を尽くすなどということは、そもそもが原則的にあり得ないことなのである。孝行集「弥天道安母孝事」が高僧伝以下、正統的な仏教史料中にその内容を見ないことも、強ちに理由がないことなのではない（宇井氏前掲書第一章「道安伝」一「出生と幼時」）に、道安は「十二歳で出家したが、高僧伝には、家は世々英儒で、早く覆蔭、恐らく父母、を失うたので、外兄の孔氏に養はれた」とあるから、不幸な境遇であつたのである」とされるによれば、それを仮構と断じてもよからう）。従つて、孝行集のそれは、高僧伝等に録される道安伝とはまた、別の流れの上にある、もう一つの道安伝として捉えることが出来る。そして、その道安別伝の源流の一につに当たるのが、説草「道安仕母事」であろうと推定される。おそらく孝子道安の話柄そのものは、例えば説草を駆使する唱導（譜經）の地平において準備、形成されていったものなのであろう（同様のことだが天竺の目連また、本朝の源信についても起きていることは、問題の深さを物語つてゐる。拙著「中世説話の文学史的環境」I三

5及び、付、また、「中世説話の文学史的環境 総」I—2参照）。

孝行集³⁴「弥天道安母孝事」は、唱導に流れる因縁譚としての道安別伝を掬い上げ、一話に仕立てたものと思われる。

第二に、孝行集と説草とのだならぬ關係を傍証するのは、例えば孝行集「弥天道安母孝事」に、

弥天道安法師……三千人有弟子

とある一節が、前述の説草「悲母因縁」に、

弥天道安法師、有三千人弟子

などと見えることである（高僧伝「僧衆数千」）。不思議なことに、この一節は、説草「道安仕母事」の方には見当たらぬのである。「悲母因縁」は、「恵咲勸邪見母令臨終正念事」等とも副題され、道安の弟子である恵咲比丘の孝行譚を内容とする点、道安別伝の一流に連なつてゐる。それにしても、「悲母因縁」や「悲母遠忘旨趣」等の説草に散見する道安譚が、当然前提にしたものと予想される、同じ金沢文庫所蔵に掛る「道安仕母事」ではなく、「悲母因縁」の場合、却つて、孝行集「弥天道安母孝事」と文言を共有していることは、孝行集の棹さした流れが、やはり唱導であったことを暗示しており、同時に、道安別伝の形の多様さをも示唆してゐる。上に見た如き、孝行集「弥天道安母孝事」と説草「道安仕母事」との間隙を埋める、道安別伝があつたのだろう。

さて、孝行集は、例えば私聚百因縁集と密接な関わりをもつてい

た（前掲拙稿「唱導、注釈、説話集—静嘉堂文庫蔵孝行集について（続）一」参照）。中で、孝行集²⁵「天竺堅陀羅國貧女事、孝因縁」については、私聚百因縁集二・8「堅陀羅國貧女事」及び、同文の説草「堅陀羅國貧女事」（尊想寺蔵本等）との関係が問題なのである。一方、金沢文庫蔵の説草類にも、私聚百因縁集と関わるものがある。例えば、「不動能延六月事」と題するそれには、本文冒頭に、

およそ説話というものの、説話集と説草との往還相の問題として、押さえるべきであろう。小論で取り上げた弥天道安のことも含め、説草と説話集との関わりに、今後とも注意を払ってゆきたい。

（くろだ あきら／愛知県立大学教授）

と記され、「波羅奈国貧女売身事」には、表紙に、
百因縁中第三

と記される等である（納富常天氏「湛香の唱導資料について〔二〕参考照」）。ところが、その「百因縁集」の直ちに私聚百因縁集に帰せられないことは、納富氏が「なお「百因縁集」は忠勤住信撰「私聚百因縁集」とは異なる」と言われた如く（「湛香の唱導資料について〔一〕」、注²⁶）、共に私聚百因縁集には見えない話となつていて。そして、後者の説草「波羅奈国貧女売身事」は、小林文庫本百因縁集43「波羅奈国貧女事（売身供仏僧事）」に、同話が見えるのである。加えて、金沢文庫蔵の説草類には、「百因縁集」等の明示はないが、明らかに私聚百因縁集と関わるものもある。例えば「不動尺、示郭因縁」と題されるものなどがそれで、当書は、私聚百因縁集六・2「示郭事大型不動」と、ほぼ同文関係を有するのである。右の問題は、